

都会の温暖化とは

日本の、そして地球の温暖化対策が重要であることは言うまでもありません。

しかし、都会で出来る温暖化対策は、地域の意識と情熱により可能となります。

都会とか街中の住宅地では、四季がはっきりと感じられた昔の気候は姿を消し、春夏秋は湿度が高く蒸し暑く、日没後もその状態が続き、朝と夕暮れ時とか、季節の変わり目とかの変化を感じる事が少なくなりました。

以前は、春は麗らかで、初春には冬の冷たい風が時々吹いたり、天気の良い日には、ゆったりした春の日差しを感じる事ができ、夕暮れ時には春風が吹きました。夏は暑くても朝夕には風が吹き、蒸し暑さを吹き飛ばしてくれたり、夕立のあとは涼しげな風を感じて爽やかな気分になることもありました。秋は空の色も秋空となり、秋風など吹き、秋の夜長の夕涼みと言った季節感を感じる事が出来ました。冬は凍りつくような寒さであったり、街中でも雪が積もり、庭先とか、北向きの瓦屋根の日陰では、何日も雪が解けないで残っていて、冬の景色を見る事が出来ました。

以前のように、四季の特有の風を楽しめる住宅地とか都会を再現するには、如何すればいいかを考えることにします。

海岸の気候を考えると、太陽が昇り陸地の温度は上昇しますが、海水の温度はさほど上昇しません。昼間、陸の空気が上昇し海から冷たい空気が陸へ吹くのが「海風」で、夜はその逆に陸の温度は急激に低くなり、海水はさほど低くならないことによる、陸から海への空気の移動、つまり「陸風」が吹きます。

この空気の移動（風）により、季節感のある気候を、都心でも復活できないでしょうか。

住宅地などでは小川を復活させたり、池を多く作ることにより、海（水）と陸の関係による、昼と夜の温度差による海風と陸風と言った気象現象が再現できれば、「麗らかなそよ風」や「夏でも、ひんやりした風が吹いた」、本来の日本の気候を取り戻すことができるかもしれません。

地中に埋没された小川や池などの復活事業により、川や池の水による排熱作用の復活とか、太陽による朝夕の陸と水の温度の上昇率などの相違により風を

吹かせれば、四季のある都会も夢ではありません。

都心でも、ちょっとした空き地や避難場所と言ったスペースに、「池」を作れば、水、土、コンクリートなどの熱伝導率の違いとか、太陽の光による分子の振動などにより、陸地と池などとの温度差が生じて、温度が低い方から高い方への空気の移動（風）を、朝夕に吹かせることが可能と思います。

災害時にもそのような空間はあった方がよく、特に大火災のときには池や川があれば非難場所や、火災の拡大を止めたり、放水用の水としても利用可能です。

更に、池や小川が身近にあれば水辺の生物が生息可能となり、「蚊やボウフラ」の天敵のやご、トンボ、クモ、小鳥などが増え、蚊の自然駆除にも繋がると考えます。

今から5～60位まえは、住宅地でもちょっとした広場の上の空にトンボ「アキアカネ」などが飛び交い、その数が凄まじく、広場全域の上空間に幕をはったようになることもよくありました。

又、ちょっとした広場や公園、木々の多い庭、更に言えば里山などは、蜘蛛の巣があり、蚊などがびっしりと貼りついていて、子供たちがぐりぬけて遊んでいるのを見るのもいいですね。庭や里山や公園には池を作り、昆虫や鳥たちが増えれば蚊の天敵の増加となります。

又、池の多い自然公園を多く作れば、樹木とか芝生などにより、空気の熱を奪い温度を下げる効果と、水による排熱作用により都市の温暖化防止になると考えます。

「蚊」と「蚊の天敵」の両方を絶滅させる計画より、蚊の天敵の増加により蚊を減らすことができればと考え、その難しい目標に向かって努力することに意義があると思います。

更に、花粉症が頻繁な現在、舗装道路では中々、花粉が土や水に住む微生物により分解されることがなく、分解までに時間を要します。しかし、都会や街中の住宅地に小川や池や自然公園を作れば、花粉の飛び交う時間と量を減らすことが可能と考えます。

14.11.17